

よかったのに…と時々悔やみます。一方、博論完成の過程は、まさに先生方や学友たちの助けの下で、この「自覚力」を鍛えるプロセスそのものだとも思います。こうして、自分が過去の失敗をもってようやく理解した「自覚力」を、この場をお借りして、今後のための覚書として書き留めたかったです。

博論を振り返って思ったことは、実に言い切れないほどあります。先輩たちの「博論を振り返って」でもたびたび述べられたように、社会学講座の指導体制、社研全体で作られた場は、個々人の成長に大きく資しました。先生方をはじめ、社研の皆さんに対して、言葉も見つからないほど感謝しております。特に、留学生の私は、日本のこと、しかも日本の「時代外れ」の公害問題を研究課題としてやり抜いたのは、格別に丁寧なご指導と力強いお支えをいただいたからです。真っ赤に修正され、または付箋がいっぱい貼られた原稿、紙の裏まで書き綴られたコメントなどは忘れられないものです。また、姉妹のように一緒に歩んでくれた同門の仲間たち、占いの特技を用いるまでいつも励ましてくださった先輩をはじめ、良き学友に恵まれ、「一人ではない」心強さに常に支えられていました。

在学中、指導教員に研究の具体的内容にとどまらず、「悩みを楽しむ」方法や「上手な悩み方」についての指導も受けてきました。「博論を楽しく書こうね」という話は、指導教員によって、冗談半分に、わが研究室のモットーに指定されました。博論完成まで、指導を受ける側だけではなく、指導する側もいろいろと悩むに違いありません。知らないうちに先生方に与えてしまった指導の悩みが知りたいです。また、「自覚力」が大切ですが、先生方から見た私たちの博士完成過程も伺いたいものです。いつか「博論指導をふりかえって」というコラムもあればと願いつつ、結びの言葉として、「正しい悩み方をしようね」と自分にも後輩たちにも言いたいです。

## 「ほんとうに切実な問題」に取り組むということ

翁川 景子

博士論文を通して、私は、私にとっての「ほんとうに切実な問題」に、間接的にはありますが、取り組むことができたように思っています。何をどう書いたらよいかさっぱり分からなくなってしまい苦しい時期もありましたが、そんな最中にも「ほんとうに切実な問題」を手放さないこと（ある社会学者はこのことを繰り返し述べています）が、重要であったと思っています。10代の頃に、自分が生きる世の中について深い疑問を感じ、様々な要因が重なって社会学を専攻し、それから十数年の時を経て、やっと、「ほんとうに切実な問題」のほんの一部を明らかにするとともに、今後のアプローチ方法が分かりました。これは、博士論文を執筆するという大作業を経なければ、至ることができなかった境地だと思っています。

私は、研究テーマを「絞る」というよりも「広げ」て、関心のおもむくままあちこちに手をつけてしまうタイプでしたので、博士論文を書く際にも広がりすぎてしまったテーマたちに筋を通すことが最もたいへんな作業でした。筋を通すには、自分の研究テーマの位置づけを相対化することが必要でしたので、テーマの背景となる知識を得るためにかなり勉

強し直しました。そして、勉強し直した知識ばかりではなくこれまでに蓄積してきた研究成果さえも捨て、つまり、「素材の集中と選択（これは、名古屋大学の社会学研究室の先生にいただいたアドバイスです）」をすることで、どうにか筋を通すことができました。博士論文に反映できた知識は、このような裏作業で得た知識のほんのわずかな部分に過ぎませんでしたが、この裏作業こそが、これからの研究テーマにつながることとなりました。また、中世の哲学者フーコーは、「本当に深く学問を修めたなら、最後は靴直しとか、陶工になるべきだ」と述べていますが、幸か不幸か、その意味も少し分かってきました。

最近、一見ひどく遠回りをしてから博士論文に取り組んでいる人たちによく出会います。しかし、遠回りをした間に経験してきた感情や出来事に裏打ちされた知見、発せられる言葉、彼ら／彼女らの、学問的实践と生活の結びつきには、有無を言わせぬ説得力があります。急いで成果を出すことが求められる時代の風潮のなかで、自分の思考が熟成するのを待つことはときに辛いものですが、博士論文という大きな仕事において、自分にとっての「ほんとうに切実な問題」に少しでも取り組めたのなら、自然と、道は開けていくものようです。近年は、博士号を取得しても職を得ることができず、「厳しい」といわれる状況が続いており、他者との競争関係になりやすく、研究活動もこうした環境に左右されてしまうことがあります。しかし、「ほんとうに切実な問題」を持ち続けていると、考えてもみないやり方で活路が見い出されることもあるようです。

この文章を読まれている方には、これから博士論文を書こうとお考えの方もいるかと思えますので、以下からは、博士論文を書いている最中に私がおこなった生活上の工夫をご紹介します。どれもささいなものに思えますが、博士論文は長期戦となりますので、毎日の生活の中に、博士論文にかかわる作業をいかに組み込んでいくかが大事だと思います。まず、(1) 家族や友人など、自分に「承認」を与えてくれる人間のサポートを日常的に受けられるようにする。一般的な傾向として、社会学の論文はそれを書いている本人の「生き方」のようなものが入り込んでしまいやすく、そのため、論文を書いている本人自体も批判的な評価の対象であるかのように錯覚してしまうところがあるので、精神状況が追い詰められがちになるようです。ですから、家族的なつながりをもつ人びととの承認し合える関係が執筆期間中の支えとして大切だと思います。

次に、(2) 身心のバランスをとるために、家事や農作業などの「手」を使った日常生活のための営みをする。皿洗いをしているときに、アイデアを閃いたという話は実際よく聞きますので、家事などの日常生活の営みはあなどれません。論文を書くという作業では、頭の中で抽象的に考えている時間が多く、なかなか目に見える成果がでませんが、家事や農業は手を使った具体的な作業で、すぐにわかりやすく成果がでて達成感が得られるので、その点が身心のバランスを保つのに機能したように思います。

そして、(3) 執筆するためのリズムをつくる。これは、集中執筆へ入るための「助走」のやり方を掴んでおく、ということです。執筆に入る前に何か決まった作業をすると、リズムよく執筆できるようです。私は、「書きたいという欲求」を刺激してくれるある一冊の本を、執筆の前に 30 分程度読むとスムーズに集中的な執筆に入ることができました。以上が私がおこなった工夫ですが、それぞれの研究テーマや生活環境に合わせて工夫を凝らし、一定のペースで取り組める環境を本格的な執筆に入る前につくっておくとよいように思います。

最後になりましたが、博士論文を書いている間には、ほんとうに多くの方々にさまざまなかたちで励ましをいただき、また、支えていただきました。ひとりひとりお名前を挙げてお礼を申し上げることは、ここでは控えさせていただきますが、感謝の念はこれからも尽きることはありません。ほんとうに、ありがとうございました。お世話になったみなさまに、感謝の念が伝わることを祈りつつ。

## II 書評

### 労使関係のフロンティアと多様化する労働組合の模索

(呉学殊著『労使関係のフロンティア—労働組合の羅針盤』労働政策研究・研修機構 2011年)

名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程

中根 多恵

本書は、「労働組合の存在意義の希薄化」を現在の日本の労働組合における最たる課題とし、労使関係を取りまく日本社会の変化に左右される労働組合の「今後」をどう捉えていくべきなのかという問いに対し、多様な新しい取り組みを模索する労働組合の「フロンティア」について本書のすべての章をささげて論考したものである。本書に付されたタイト

ルには、「それぞれの労働組合が360度の羅針盤の上のどこにあるかをチェックし、今後の方向性を考える際に、フロンティアを走っている労働組合を参考にしてほしい」という著者の思いがこめられている。多くの研究者が部分的にしか取り上げてこなかった現在の労使関係をめぐる多様なフィールドを、総体的に把握しようと試みたという点に本書の新しさがある。本稿では、本書の内容を概観し、本書の意義と課題について考察していきたい。

まず、本書の構成を概観しよう。本書は、序章と終章を含めた計13章が5部で構成されている。第1部では、労働組合低迷のなかで新規に結成された労働組合の結成理由や結成後の労使関係などの現状について質問紙調査から検討したうえで(第1章)、パートタイマーの組織化と組織化後の意見反映システムについて、サービス業系企業の6つの労働組合の取り組みを事例に考察し(第2章)、企業別組合のCSRへの取り組みによる組合の存在意義が高まる可能性を論じている(第3章)。つづく第2部では、企業グループ経営と労使関係の拡大に焦点を当て、鉄鋼関連企業を対象にその企業グループ経営や人事労務管理を詳細に記述し(第4章)、2000年代前半における持株会社の設立にともなう労使関係の変化について考察し、経営者側へも実践的な示唆を与えることを試みる(第5章)。第3部では、中小企業の労使関係と労使コミュニケーションについて質問紙調査から考察し(第6章)、「働き甲斐のある会社を目指す労使関係」に向けた取り組みを石油製品小売業C社の事例に基づいて検討し(第7章)、さらに集团的労使関係の構築という観点から、労働組合の現状と従業員代表制の模索について論じている(第8章)。第4部では、個別労働紛争の